

二面性

恵北中学校3年 黒川 紗世

「利き手は左、右どちらですか。」

あーまただ、面倒くさい。相手に悟られないように小さく息を吐きながら、何度目かもわからない質問に答えるのだ。

「左利きです。」

と。厳密に言うならば、私は完全な左利きではない。右だって人並みには使えてしまうのだが、「両利きか」と言われるとそでもない。私はずっと、この答えが出ない質問に悩み続けていた。

初めて右手を使ったのは、幼少期の箸の練習。たまたま練習用の箸に左利き用がなかったため、右利き用で練習をしていた。母いわく、それまでは物を持ったり全ての動作を左手を軸に行っていたらしいが、特に問題もなく右手を使うことが定着していき、小学校に入学するまでには左手とほぼ同様に使えるようになっていった。

少しずつ左右の使い分けに慣れてきた小学三年生の頃、思いがけない試練が私の前に現れた。習字だ。先生の説明が頭に入らないくらいこればかりは対応に困り、とりあえず左手で書いてみるも上手く出来ない。そもそも字なのか疑うレベルで書けないのだ。周りを見ても当然、右利きばかり。自分でどうにかするしかないと思った私は、左手で書けないならと、持っていた筆を右手に持ち替え、右利きの友達を真似て筆を動かした。

そうしてなんとか授業を乗り切り、一か月ほどして校内の作品展に出すものが発表された。自分には無縁だと思っていたが、習い事として習字をやっていたり、上手な人に紛れて何故だか私も選ばれていて。右利きだけが全てじゃない、自分工夫次第で結果は出せるんだと初めて思えた瞬間だった。

ただ、どれだけ左右の使い分けが出来るようになっても利き手の悩みは解消されず、冒頭のような質問をされても左利きだとしか言えないまま。左利きではないのに左利きと偽っているようだった。そんな時、私の中の利き手の概念を大きく変える記事を目にした。

一般的な利き手の種類として、右利き、左利き、両利きの三つが知られているが、使うものや場面に応じて右手と左手を使い分ける人のことをクロスドミナンス、日本語では交差利きという。

一見両利きと似ているが、同じ作業を両方の手で出来ないのが最も大きな特徴である。クロスドミナンスに分類される人は全て後天性で、左利きを矯正されて作業によっては右でしかできないようになった、怪我などにより右または左のどちらかで作業をしなければいけなくなった、といった理由で左右の使い分けをする人が多いのだという。

これはまさに自分のことだ、そう思った。右利きが人口の八割、九割を占めているせいで、

必然的に右利きばかりが優先され、それが普通だという常識が形作られる。だからこそ少数派である利き手の人が生きにくく、何をするにも我慢が強いられてしまう社会が出来上がってしまったのではないかとすら思ったのだ。

ほとんどの人が「左利きだと大変そう」、「右利きに矯正されなかったのか」と、私が「左手をよく使う」だけで完全な左利きだと思い込み、悲観してきた。余計なお世話とでも言いたいところだが、もちろん、何をするにしても普通とは逆の動作をしたり、左右の使い分けをするのは負担が大きく、難しい。それでも私は、右利きに矯正してほしかったとは思わない。

左利きでも右利きでも、両利きでもないクロスドミナンス。この中途半端な立場でしか見えない景色があり、得られるものがある。

これから先、どんな困難が待ち受けていようとも。

一利き手も含めて「私」なのだから。